

- 代表者名 代表取締役 土橋 祐之
- 設立年月日 1954年(昭和29年) 3月
- 所在地 〒400-0834 山梨県甲府市落合町551-7
- TEL 055-243-1084
- FAX 055-243-1087
- E-Mail hiroyuki@dobashi.com
- 業 種 塗料卸売業
- 資本金額 1,000万円 ■ 従業員数 7人

インタビュー



代表取締役 土橋 祐之

テーマ

環境配慮型塗料工程導入支援による作業環境改善と生産性向上の実現

自動車補修塗装において環境配慮型の塗装材料を用いた革新的な作業工程の導入支援を図り、作業者の健康・安全を守る作業環境の改善と、作業の生産性向上(作業の効率化と作業工程短縮)により高品質で付加価値の高い塗装技術の飛躍的な向上を図る。



塗装ブース

一般的に塗料は、塗装後に塗膜として残る樹脂・顔料・添加剤と、揮発して塗膜には残らない溶剤から成っている。古くから溶剤として有機溶剤が多く用いられていたが、環境対応や塗装作業者の安全面への観点から、有機溶剤の代わりに水を使用する水性塗料(水系塗料)や、溶剤を含まない無溶剤形塗料、粉体塗料など、いわゆる環境対応塗料の需要が近年急速に伸びている。地球環境保全への問題意識の高まりや揮発性有機化合物(VOC)排出規制が強化される中で、水性の補修用塗料の技術革新も著しく、今後水性塗料が主流となる時代が必ずやってくる状況となっている。しかし、現実には未だに有機溶剤型塗料を使用する鍍金塗装工場が少なくない。

当社の取引先では水性塗料の使用に意欲的な鍍金塗装工場が多くあるが、なかなか普及が進んではいない。その理由として下記のような課題がある。

- ①鍍金塗装工場が塗料メーカー主催の研修会に参加したくても、研修場所が県外など遠隔地で時間と費用面での負担が大きい。
- ②塗料メーカーの技術者を招いて研修を企画しても研修場所が県内にはないため地元鍍金塗装工場に会場提供を依頼しなければならず、日程調整ができない。
- ③研修会場が確保できたとしても、地元の鍍

金塗装工場には研修に必要な設備や作業環境が整っていないため、最先端の技術情報の提供ができない。

次への打開策として「山梨県内に水性塗料対応の最新設備を有した環境配慮型の研修場所を設置する」ことを決意する。

「イタリア製塗装ブース サイマ」他を導入して効果的な研修を行える環境を用意した。

まずは社員全員で検証作業を行いながら、水性塗料を用いるマニュアルを作成。ここで作成したマニュアル及び検証後のテストピースは後日の研修時に使用する教材となる水性塗料導入に積極的でない鍍金塗装工場にも環境対応塗料(水性塗料)を普及させるため、水性塗料を用いた自動車鍍金塗装修理についてのマニュアルを作成する。

先進的な鍍金塗装工場と連携し水性塗料の技術サービス向上に努めることで、水性塗料の利用拡大を推進し、ネットワーク上でも情報提供を行うことによって、サポート体制の充実を図る。さらに後継者が塗料メーカー主催の6ヶ月にわたる研修に参加。業務知識が豊富なことから、塗装業者に直接技術的なアドバイスをを行い、信頼関係を構築することとなる。

ひとつの施設(場)の存在から、技術と情報を伝達拡大することにより、信頼ある安定した販路の拡大につながっていくと確信する。



模擬研修

自動車補修塗装に研修会はつきもの。効率的な作業・工程を共有するために販売店にできること



外観



配合表

そもそもは食油を販売することから商売が始まった。その後、二代目兄弟が塗料問屋で修業をし、1935年塗料販売店を開業したのだという。

「ずっと、塗料販売を家業としてきました。」とは、三代目となる土橋社長。

「塗料も始めは建築用の塗料を扱っていたんですが、時の判断で、自動車用塗料に移行したんですよ。いい判断でした。」とは社長のお母さまより伺いました。仕事上の判断の結果は50年後に適正な回答が出るのだ。

時代が変わり時流に動かされつつ、自動車塗料を販売することとは、まず自動車補修塗料、そして塗装副資材、塗装機器と取り扱うアイテムがどんどん増えていく。自動車メーカーは次々新たな車種を生みだしデザインもカラーも独自性が売りとなって、塗料メーカーは新車用の塗料開発から補修塗料の開発にと専心していく。この世にあるすべての自動車のカラーリングには、まずは自動車メーカー発のカラーレシピのような「配合表」

の存在がある。塗装する場合、配合表に沿って適切な塗料を混ぜ合わせ、色合わせをしていく。最近では、専用カメラで測色し、コンピュータ上で配合データを判断できるようになってきた。また塗装の技術にもその独自性を生かすための違いがあるという。この工程の流れを円滑にする役を受け持つのが、卸販売店となる。塗料や希釈剤の選定、作業工程・技術も含め、メーカーと塗装技術者をスムーズに繋いでいるのだ。

「研修会や講習会は常々よく実施しているんです。メーカーから技術者を招いて、板金塗装工場の施設と場所をお借りして。都合を合わせるのもなかなか大変で、それならウチに施設があれば…」と。



研修ルーム

水性塗料へ円滑に移行するため。そのハードルを突破する研修施設を設置する



色順に並べられた塗料ストック

卸販売の仕事の多くの部分を占めていることに技術・知識の共有と拡張がある。各自動車メーカーごとに、また車のパーツごとに越えるべきコツがあり、全国どこでも同じ再現がなされるために大切な研修会・講習会なのだという。

そして、地球環境をも踏まえて水性塗料の使用が望まれる中で、そもそも有機溶剤と水性塗料ではその性質の違いによって、扱いが変わってくる。単に有機溶剤から水性塗料へ塗料を替えればいいというものではなく、塗装工業の面々も扱い・技術・方法と日頃の仕事をこなしながら、新しい技術を習得しなければならない。水性への移行には多少のハードルがある。

このハードルの突破を卸販売会社・ドバシが受

け持つ。いままでの研修では、顧客である塗装工場で仕事上の施設を時間で空けてもらい借りて、メーカーから指導員を招き開催するのだが、タイミングよく効率的に開くことが難しかった。「円滑に」を旨とする土橋社長は歯噛みするような思いでいたに違いない。

そこで水性塗料対応の最新設備を自社内に設置することを決意。環境配慮型の研修場所の誕生となった。あわせて研修のマニュアルも作成し、研修のポイントを指し示す模擬研修を重ねて、成果を出している。

そして、大きく振りかぶればこれはCO₂の削減を実現していることで、地球貢献の一端がスタートしたと言えるのだ。



塗装関連商品・部品・器具